

1997年11月24日 (奇数月発行)

第7号

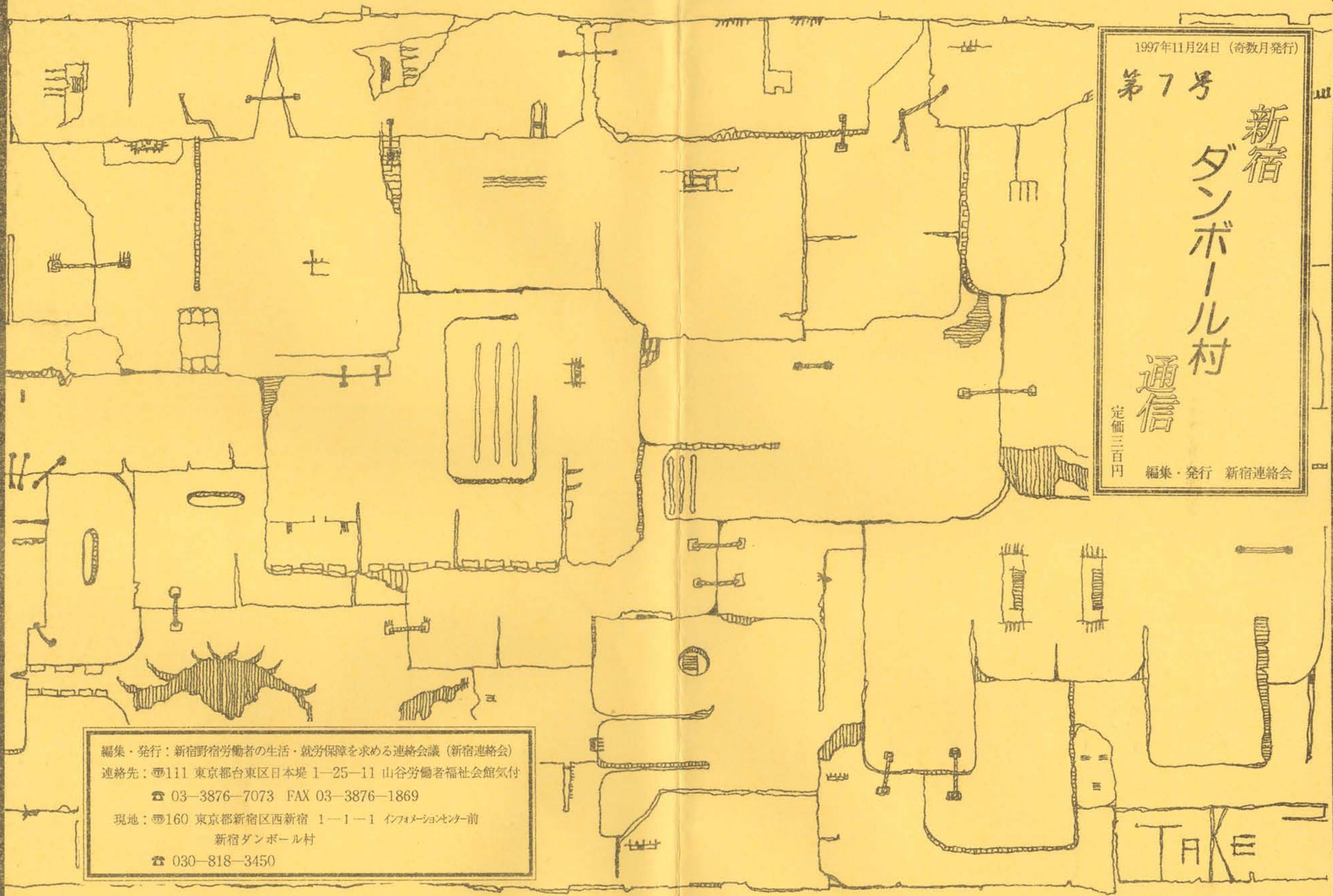
新宿

ダンボール村

通信

定価三百円

編集・発行 新宿連絡会



編集・発行：新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議（新宿連絡会）

連絡先：〒111 東京都台東区日本堤 1-25-11 山谷労働者福祉会館気付

☎ 03-3876-7073 FAX 03-3876-1869

現地：〒160 東京都新宿区西新宿 1-1-1 インフォメーションセンター前

新宿ダンボール村

☎ 030-818-3450

TAKE

コノゴロ ミヤコニ ハヤルモノ

## 新宿、路上河原の落首

—包み紙の裏にて投文—

ホームレス	初めて作る	都知事さん
ホームレス	作ってなやむ	都知事さん
ホームレス	かしてあげるよ	都知事さん
ホームレス	たいさくなしの	都知事さん
ホームレス	はかばになるよ	都知事さん
ホームレス	ゴミではないよ	都知事さん
ホームレス	見に来てごらん	都知事さん
ホームレス	話おしましよ	都知事さん
ホームレス	仕事おするよ	都知事さん
ホームレス	ふやしてだめよ	都知事さん
ホームレス	見ぬふりだめよ	都知事さん
ホームレス	たすけてリッパ	都知事さん
ホームレス	いっぴょうかくよ	都知事さん
ホームレス	米を食いたい	都知事さん
ホームレス	やくにたちたい	都知事さん
ホームレス	いじめてあそぶ	都知事さん



# 肖像

「何だかもう、あきらめて  
しまっていたんだよ」

## 表紙絵

新宿、路上河原の落首  
肖像  
あのね・・・伊藤孝夫さんのお話  
路上川柳  
私がここに来たわけ

武 盾一郎

—— 1  
—— 2  
—— 3  
—— 4  
—— 5

## 新宿写真館

橋本 弘道

—— 7

## 底

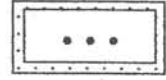
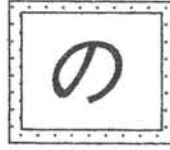
辺下層に組み込まれた  
労働者がたどる最下層の還流点

笠井 和明

—— 9

活動日誌 ・ 会計報告  
編集後記

—— 14  
—— 14



いとうたかお                      はなし  
・伊藤孝夫さんのお話・

やあ、こんにちは。コーヒーでも飲むかい。今日は冷えるから、何か熱いものがないな・・・。

・・・平野さんの話をしようか。この間亡くなった、平野さんのことを話したいと思ってたんだ。平野さんとは隣のハウスだったから。仕事を一緒にしたことはないんだけど、夜は一緒に、いろいろな話をした。あの人、俺と同じくらい、62才だったんじゃないかなあ。隣にいたの、一年半くらいだった。初めて会ったのは、新宿の区役所なんだよ。カップ麺を食べているとき顔が合って、おもしろそうの人だと思った。その時から、良い印象を持っていたんだよ。俺ここに初めて来たときは、向こうの柱の影で、一人で寝ていたんだ。こんなふうにと隣り合って暮らすのは、合わないと思っていたから。人に気を使うから、イヤだったんだ。平野さんは隣で暮らしても、性格のおとなしい、いい人だったから。大ざっぱな俺とは正反対の人だったから、うまく合ったんだろうなあ。

自分は酒を飲まないから酒を飲む人とはなかなか合わないんだけど、平野さんとはとてもいい酒を飲む人だった。通行人の人が差し入れて、お酒のカップをハウスの前に置いていってくれたりするでしょ。そんな時は、これは内緒だよ、平野さんにそっとあげたりした。あの方は酔っても、絶対に人に迷惑はかけない。人にかままれても相手にしない。酔うと鼻歌を歌って、小さく手だけでね、こうやって踊ったりしてたよ。楽しい人だった。俺は料理なんかもざくざく大きく切ってしてしまうけど、平野さんとはとてもいねいに細かく切って料理をするんだ。それで、ハウスの壁を向こう側から叩いてね、そうしたら夕食の合図で、料理を分け合って、食べたりした。夜遅くエサ取りに、残りご飯をね、探しに行く時なんかも、いつも一緒だった。地下鉄の新高円寺の駅の方まで行った。ここから早足で歩いても、4、50分かな。でも平野さんと一緒のときは、いつも話をしながらゆっくり歩いたから、一時間以上はかかったなあ。

平野さんとの話？ うん、いろいろな雑談をね、ああでもない、こうでもないって話すんだよ。よくラジカセを片手に、中央公園の方まで散歩をした。二人とも演歌が好き

だから、聴きながら、歌って。ネコ？ ああ小川さんのとこのネコをね、外出中は俺か平野さんが預かって見ていたんだよ。あの人はとても可愛がっていたね。

・・そういえば、今でも強烈に覚えている言葉がある、平野さんの言ったことの中では・・。あのね、「ここでは死にたくない」って・・、「死ぬときは、ここでは死にたくないなあ」って、平野さん、言ったことがあったよ。この近くで、路上で仲間が亡くなった頃だった。平野さん、とてもショックを受けていたんだよ、その事で。「俺や伊藤さんも、自分たちもいずれはそうなるのかあ」って。その時に「ここでは死にたくない」って言ったんだ。多分、それは平野さんの本音だったんでしょ。偽らざる言葉だと思った。だから俺、背中をバーンと叩いて、「お互い同じだよ、そんな考えを持つな」って、どやした。俺としては、そうやって、励ましたつもりだったんだ。平野さんが入院してから、お見舞いに行ったとき、「ああ伊藤さん、よく来てくれた」ってわざわざ起きあがってね。だから俺、そんな無理しないでくれって止めたんだけど、今日は気分がいいからって、来てくれて本当にありがとうって言って、俺の手をね、こうぎゅうっと、握ってきた。平野さんは手が小さくてね、小さくて、本当に可愛らしい手だった。俺と平野さんが握手すると、大人と子どもの手のようなんだよ。笑っちゃうよなあ・・。

亡くなったって聞いたのは、日曜日の炊き出しが終わった後、こっちに帰ってきてからだよ。・・うん、信じられなかった。自分の耳をね、疑ったよ。嘘だろう、何か聞き間違えたんだろうと思って・・。

この間、笠井さんと、あの人のダンボールハウスを片付けたんだよ。残していった荷物をな、片付けた。平野さんのダンボールハウスの中は、きれいに片づいていたよ。よけいなゴミとかなくてね、きちんとして、きれいに片づいていた。

### 路上川柳

世の中のつかいすつるよホリスレス  
わか子見てあわてにげるホリスレス  
ホリスレスこまかはかばとるみるする  
わか親かホリスレス見てるみるする  
ホリスレスぞれかすまのとうまぎきう  
朝あきう行くとるまホリスレス

詠み人知らず

お金もないけど自由があるんじゃないの？」って思われがちなんじゃないかと思うけど、市場経済的価値が物を言うこの社会で、資本や土地や共同体から切り離された孤独な「個」となり、自らの持つ労働力さえも必要とされなくなったとき、どれほどの選択の自由が残るのだろうか？ しかも人間として生きる権利も機会も奪われたままで。

未知の可能性を秘めたいくつもの道が眼前に広がっているにもかかわらず、それに気付かず、寄り道する楽しさを味わうこともないままに、なんとなく生きて（生かされて？）いる人たちがいる。かと思えば、人間として「生きる」機会を奪われた状況で日々の「生命」を削られながらも、したたかに「生きよう」とする人たちがいる。人間の社会って本当に複雑で不可解ですよ。そのなかでもとくに、人間として「生きた」とは言いがたい状況のまま、「いのち」をふくらませることなしに「生命」を終えてしまうような人たちを、人間の社会（つまり私たち）が生み出し、しかも見過ごしにしているとしたら、それはあまりにもかなしすぎる。

「個」としての能力の限界、経験の限界は、他者との生産的な関係を築くことによって乗り越えてゆくことができるのではないかと思います。（生産的な関係——新たな「いのち」を生み出してゆくかわりあい・つながり——に必要なものは、相手も自分も対等に尊重



## さ いう

することのできる愛情と、冷徹なまでに真実を見極められる目を養うことではないかと、私は思います。）人間の社会、人と人とのつながりが、もっと多くの味わい深い人生を育むことのできるものとなるにはどうすればよいのか？これは頭で考えるだけじゃなくて、実践を通してじゃないとなかなかつかめないことですよ。

より味わい深い、わくわくするような人生を求めてここに来てみたんですけど、ダンボール村というのは「生きる」ことに関する様々な問いを投げかけてくる場所でもあり、学ぶことも多いです。ここにきて一番強く感じたことは、「生きる」ことは「闘い」でもあるんだってことかな。「闘い」というのは、敵をやっつけるっていう意味じゃなくて、人の痛み鈍感になってしまった社会（権威主義的な者たちは特に）に対し、ごみ同然に扱われる人間の痛みを感じてもらおうための闘い。新宿連絡会に一番共感したのは、たとえば「支援者」でしかない人たちでも「野宿者」とできるだけ同じ視点に立とうとし、沈黙するしかなかった「野宿者」がかれらなりの言葉で自分を表現できるようになる場をともに育み、人間として生きてゆくために必要なものを実際の現場から考え獲得していこうとするところですね。私はまだまだ未熟者ですが、ともに「生きてゆく」ための何らかの力になれれば、と思っています。

なぜここに来たかって？ それを話すとも長くなるんだけど、一言でいうと、おもしろそうだから。新宿連絡会の活動自体がおもしろそうだっていうのもあるんだけど、社会問題について考えるのが好きなんですよ。だから、まず、ここで何が起きていてなぜそうなるのか、どんな人がどういう人生を生きているのかを知りたい。社会における野宿者の問題を客観的・論理的にとらえるというだけではなく、人間として路上で生活せざるを得ないというのはどういふことなのかを肌で感じとりたい。毎日、生命を路上にさらし、そして路上で生命を終えるということはどういふことなのか。こう言うと少し響（ひんしゆく）を買うのかもしれないけど、私は「生命」の終り（生物的死）自体はたいした問題ではないと思っと思っています。問題なのは、いかなる死を迎えたか、つまり、どのような「いのち」を生きたことができたか、だと思います。

「年をとつたらもう駄目だよ。年はとりたくないね。」  
「若いうちはなんでもできるけど。」……もちろん、個性としての「私」の「生命」は時とともに衰える一方で、いづれ終りを迎える。「死」に向かって「生きる」という自然科学的に見た「生」の矛盾。でも、人間として生きるというのはそれだけだろうか？

私も以前は、人間もほかの動植物もすべて同じ生命だと思っていたんだけど、でも、生物として「生命」を生きたのと人間として「いのち」を生きたというのは意味

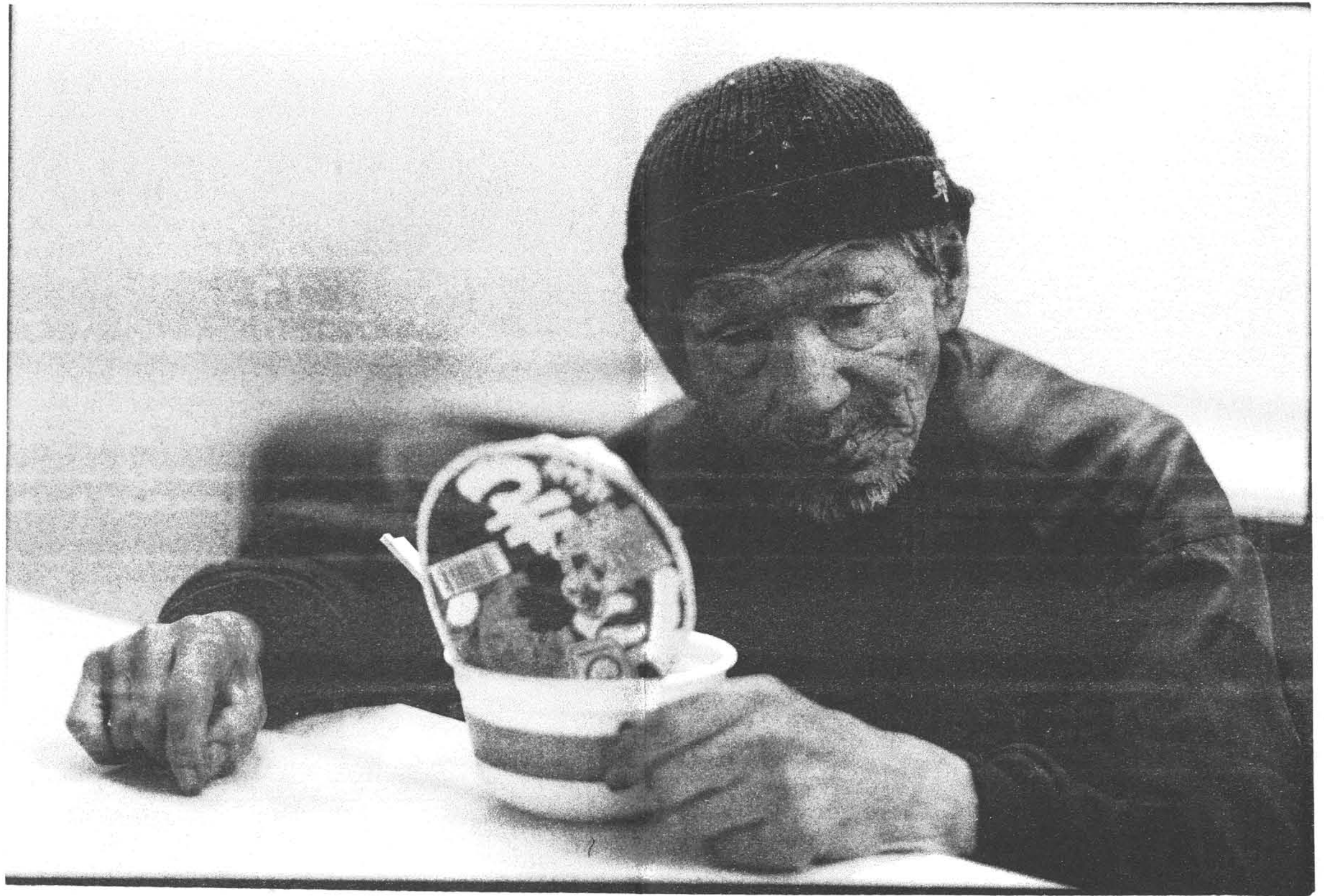
私

## がここに来たわけ

が違うと思う。人間ってすごいなって思えるのは、それぞれの生きてきた「いのち」を交流させることで、より濃密で多様性を持った新たな「いのち」を生み出していくことができることじゃないかと思えます。「いのち」って何だっっていうのは、言葉ではまだうまく説明できないけど、たとえば思想とか、自己と自己を育ててきた環境とか、その人として生きてきた歴史とか、「生きる」ことを取り巻く様々のことを含めたもので、多くの経験とか関係の中で培われていく、その人にしかないもの、しかもその人だけでは決して育むことのできないものとも言うていいのではないかと思えます。「生命」の衰えに抗うのには限界があるけど、「いのち」というのは、「私」の中だけじゃなくて様々な世界の中でも生き続け、いろんな場所や時によってまた新たな「いのち」として昇華することができるんじゃないかと思えます。

どのような「いのち」を生きていくのか？ そう考えたとき、やっぱり他者とのかわりとか、どのようなコミュニティ・社会を造っていくのかということが重要になるんじゃないかな。

現代っっていうのは、全体的に見るとある意味で「個」としての「自由」が増えた一方で、あらゆるものごとから「個」が分断されてしまっているわけですね。そして社会における様々な矛盾は、決して強者にはなく弱者に重くのしかかる。「野宿してるひとたちって、家も



新宿写真館 No.1

新宿区役所脇プレハブ内

写真 橋本弘道



# 底辺下層に組み込まれた労働者が

路上

からの

考察

はじめに

「子どもの頃、夏になると、川のそばでは必ず息をとめていた。橋を渡り、鉄橋の下を潜って行く都電に乗っていても、同じことだった。川の悪臭は子どもの眼さえ刺激して涙を流させた。プラットフォームから見て橋の右側は、土地がせり上がり、緑の濃い崖になっている。その崖下に街のゴミを集め、船で運び出す基地があった。野菜や魚や貝が、いつもそこで腐って、溶け合っていた。動力もついていない平たい船は腐ったゴミを川の水にこぼしながら、二つも三つも連なって、タグ・ボードに引かれ下流に静かに下っていった。洗濯物を腐臭のなかに並べてひるがえしているバラックも、川岸に並んでいた。そのバラックのまわりで、子どもが遊んでいた。船に乗っている子どもを見かけたこともあった。ゴミの船ではなく、やはり洗濯物を旗のようにひるがえしている船だった。」(津島祐子「火の河のほとりで」より)

昭和30年代頃であろうか、水道橋駅のたもとを流れる神田川の光景がこのように描かれている。

東京の都市にバラックと呼ばれた仮小屋が目についていたのは、そんなに古い時代ではない。

「洗濯物を旗のようにひるがえして」いた船の上で遊んでいた子どもがもし健在であるとするれば、今や壮年としてどこかの空の下で生活をしている筈だ。が、この子どもがどこから来て、どこへと旅立っていったのかは誰も知らない。我々に残された記憶はそこにバラックがあり、かつてそこに貧しい生活者がいたということだけである。

戦災復興期からオリンピック関連の道路整備事業を経て、都市に顕在するバラックはことごとく「環境浄化」の叫び声と共に潰されて行き、目にみえる貧民を減少させた。朝鮮特需から高度経済成長期にかけ、これらの人々の多くは炭鉱、鉄鋼、建設など日本の高度経済成長を支えた基幹産業の末端部に組み込まれ、都内においては山谷、高橋、百人町などの木賃宿街であるとか、飯場や劣悪な社宅であるとか、都市開発からこぼれ落ちた木造木賃アパートが密集するいわゆる木賃ベルト地帯等に封じ込まれながら、都市における底辺下層労働者(低所得層)としての階層を形成されて来た。上野百貨店、アメヤ横丁、渋谷地下街のよう、戦災時の露天商が代替地を斡旋され集団移転した例(半ば強制的にだが)はあるものの、都市貧民が築き上げてきたインフォーマルな労働はバタヤ部落の強制排除に見られるよう解体・分散が進められ、その一部を除き安価な労働力が産業に供給された。

バラックという都市貧民が発する居住への執念

# たどる最下層の還流点

笠井 和明

や、露天やパタヤという商売に表現された彼・彼女らの下層から発する生きざまは、ことごとく復興し怒涛のよう突き進む産業にまたたく間に飲み込まれてしまったのである。バラックを建てる空間は少なくなつた。産業復興と都市開発の歩みと同時に目にみえる貧民はいつの間にか少なくなり、人々の記憶から消えて行った。

都市貧民のルーツと生活史、更には彼・彼女らが発し続けてきた存在としての声を辿ることは、今日のホームレス問題をとらえる上でひとつの示唆を与えてくれるかも知れない。何故なら今日多くの人々はこの問題を個人の責任、もしくは社会病理としてとらえがちであるからであり、良心的な部分においてさえ、社会福祉の受動的な対象としてしか彼・彼女らを見ていないからである。この問題を社会問題とするならば、彼・彼女らの主体的な存在に着眼せぬかぎり、彼・彼女らは再び歴史の谷間に置き忘れてしまうだろう。

この国の底辺下層に組み込まれた労働者が辿る最下層の還流点を、私は「上」からではなく、「下」から明らかにしようと思う。無論私は活動屋である。これは学術研究ではなく、底辺下層労働者の解放運動の視点と思想を発芽させるためだけのものがある。

## 第一部 都市貧民史

都市貧民は、その時々における規模や、歴史的な変化はあるものの都市の形成史と共にあったと言っても過言ではない。この国においてはそれこそ古代律令社会からである。

ごく端的に言えば「搾取がある限り貧困はあ

る」。

城や屋敷がある都市ならば、掘っ立て小屋に住む人々や、行路死し、無縁仏に埋葬される人々がその対比として存在する訳である。今日的に言えば、超高層ビルや高速道路が乱立する都市ならば、ダンボールやテントに住む人々がその対比として存在して何等不思議はない。つい最近まで都会にはバラックがあり、浮浪者があふれ、そして今も都会の片隅には木賃宿街がいくつも点在し、冬になれば毎年公園で焚き火にあたる労働者の姿が一度たりとも消えたことはないにもかかわらず、突如都心のまん中に現れたホームレスを見て「豊かな社会」という幻想を抱えた人々は驚き、同情し、蔑みを開始したが、実は、彼・彼女らの歴史はついでることなくこの社会の中に受け継がれてきたのである。

無論、かつての無宿人や「都市細民層」や戦後のバラック住民の子孫がそのまま全て、今日のホームレスになった訳ではなからう。ある者は階層から抜け出、またある者は居住を確保し地域社会の中に溶け込み、またある者は保護施設に収容されながら基幹産業に組み込まれたり、分解を重ねて来ている。しかし、目につく部分だけを対策化してきた日本の「スラムクリアランス」的対応や福祉的施策も、階層全体を動揺させる力はなかった。階層は目につかぬところで温存されつづけ、社会の基底部として、人的には一定程度流動しながら、しかし還流構造を内部的に保持させながらこれらの層は構造的にこの社会の中に意図的に作られてきた。

だから、何も慌てることはない。この構造と時代的特徴のみを我々は頭の片隅に押さえておきさえすれば良いのである。

その理解のため、まず歴史から紐解こう。

## I、江戸・無宿人問題史

下層町民からの没落、貧窮による農村からの欠落などの理由で、人別帳から記載を削除され、一定の住所をもたずに彷徨するものを江戸時代は「無宿人」と呼んだ。無宿人層は都市へと流れ、その増加とともに治安問題として幕府の取締の案件となる。近代的意味でのホームレス問題は古くはここら辺から出発する。

そもそも江戸は大阪や京都のような伝統的な都市ではなく、武士階級の移住によって突如成立し、その市場経済力によって近郊農村などからの大量の流入人口を抱え込んだ都市である。萩生徂徠が「江戸は諸国の掃き溜め」「いつの間にか北は千住、南は品川まで家つづきとなった」と嘆き、都と農村の境界を築くよう将軍に進言したよう、あれよあれよという間に武士より町民の数が膨脹し、棟割長屋に住む地方からの出稼ぎ人などが、車力、行商、屑買い、飯炊きなどの都市雑業に従事しながら定住していく雑多な都市として発展してきた。昔から江戸っ子気質を「宵越しの金はもたない」などと言うが、これは明日の貯蓄すらできぬ下層町人の負け惜しみの表現が原形だと言われている。事実、江戸、中後期、町民の8割は窮民層といわれ、不安定な裏店の店借人としてその日暮らしの生活を余儀なくされ、



路傍の餓死者 天明3年の奥州大飢饉の犠牲者で、烏や犬が食っている。(凶荒凶録より)

彼・彼女らは頻発する火災や疾病などで流民＝無宿へ転落することも多くあった。

周知の通り、当時は封建的身分制度の世、無宿化したとしてもそのまま放置されることはなく、家を追われ、故郷に帰るあてもなく都市を野宿しながらさまよう人々は野非人と呼ばれ、取締の対象、見つければ、即お縄。非人身分に編入され、非人集団の統制下におかれるという制度であった。

江戸幕府体制下の厳格なヒエラルキーの底部、非人身分は、生まれながらの非人と、後に非人となったものとの2つの流れがあり、引受手がない軽犯罪者、無宿人、遊民、姦通者など「社会からの脱落者」は非人身分として編入され、江戸を通してつねに一万人を越えた雑多な層として形成されてきた。<sup>かかえ</sup>抱非人層は、浅草、品川など各非人頭（小屋頭）のもと抱非人集団として組織され、「お仕置御用」（警備、牢番、処刑など）への動員、<sup>ため</sup>「溜御用」（溜＝無宿のための病監、少年監、一時収容所の管理）などに集団として公役に従事しながら、錢物の貰い受けや、紙屑拾い、女太夫などで生計を立てていた。捕らえられた「脱落者」の管理はこの抱非人層が受け持ち、享保期（1716-1735）あたりまでは「非人制度が浮浪者救済・自活への安全弁として機能した」（平松義人）と言われている。その他、<sup>こうむね</sup>乞胸集団（<sup>つじさいもん</sup>辻祭文、<sup>せきざろ</sup>節季候、一人相撲など芸人集団）や乞食集団（カブリ乞食）などの「賤民層」も非人頭に支配されており、これらを含めかなり広い部分が窮乏と身分差別を固定されながら都市貧民の最底辺を構成していた。

江戸の街は次第と出稼ぎや離農者を流入させ、ついに100万都市となる。

市街化が拡大し、整備され、江戸、中後期、町人の物見遊山が盛んになるにしたがい、人々が集う場所には茶屋、露店商い、大道芸などが呼び寄せられ、火除地（幕府が設置した防火のための空き地）が自然発生的に盛り場化する。品川、新宿、板橋、千住の四宿を始め、神田、深川、根津、音羽、上野など各地に「岡場所」と呼ばれる私娼街＝花街も形成された。江戸市内最大2万ともいわれる遊女人口

の供給源は、困窮する農村からの〈人身売買〉＝下女奉公、遊女奉公であり、「女工哀史」の前史は、都市の盛り場形成と同時に遊廓への人身売買として始まった。またそれに伴い、売女業者や「女街」等の斡旋業や、賭博集団など、盛り場からは幕府から統制されないアンダーグラウンドな生業も生まれ、都市雑業は多様化し、都市流入者の受け皿を拡充していく。身分として固定されていた非人身分を基底部に、都市の膨脹は、自然発生的にそれに統制されない部分を形成し、自ずと封建的身分制度を次第に食い破っていく。封建的身分制度を浸食した者の代表が無宿人と呼ばれた人々の層であり、この数は江戸末期に近づくに従い急増する。

明和・安永期（1764-1780）から、中下層農民の潰れ百姓化、非合法的離村、無宿化が顕著となり、無宿問題の対応を幕府は非人制度を温存させたまま大転換を計ろうとする。もはや非人集団への編入が数的な限界を期していたのである。その新たな方策とは田沼時代に発案された佐州水替人足と無宿養育所である。

佐州水替人足は、無宿逮捕励行を發した上で、捕えられた無宿を「懲らしめのため」佐渡の金銀山で強制労働をさせた。幕末までその数2000名の無宿が送られたといわれる佐渡送りは、一昼夜にわたり手操りで湧き水をくみ上げる坑内で最もきつい労働であった。この重労働をただ無宿になったという理由だけで死ぬまで強制されたのである。無論打ち首覚悟の「島抜け」がたびたび行われるなどの抵抗はあったものの、その多くが失敗に終わったとされている。一方、無宿養育所は「無宿の授産・更正と郷里還往とを結合させた短期拘禁の保安処分的施設」（平松）として出発したが、たった7年で廃止され、佐州水替人足のみが残ることとなる。

天明3年7月浅間山が大噴火し、死者2万の惨劇を刻印した年に始まる天明の大飢饉は、東北地方を中心に餓死者数十万人もの被害をもたらした。農村においては中規模農家の没落が進行、潰れ百姓化し、生産人口が一気に減少、関東地方の農村では1



節季候と婆等（「人倫訓蒙図彙」より）

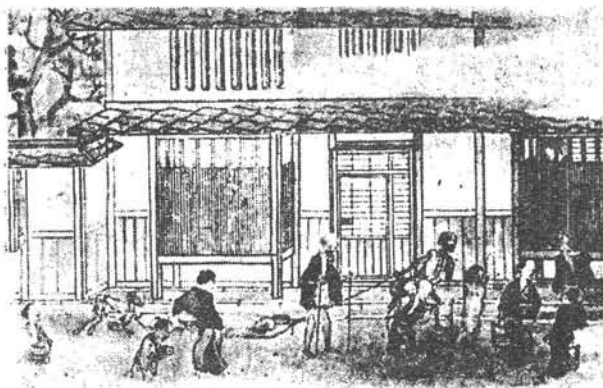
40万もの人口減が記録されている。このうち3、4万は江戸へ無宿として流入したと言われている。

飢餓対策の不徹底は、都市部においても米価の暴騰など町民生活を打撃し、奉公人などは次々と解雇、家産のある町人でも麦を食い粥をすすったというくらいだから下層町民はおって知るべし。一家心中などの惨劇も後をたたない。江戸の各地には地方からの経済難民化した農民層と、没落町人が混在化した無宿人層が急増。江戸の橋と言う橋のためには無宿人が密集し、通行人が通るたびに殺到して物をねだったという。一方、この時期、百姓一揆や都市米騒動が頻発。江戸においても下層町民を主体とする3日間市中を騒がせる大打ち壊し事件が勃発。社会不安が広まった。

この天明6-7年（1787-8年）が江戸における無宿問題のピークであったとされる。

一挙に治安問題化した無宿対策として幕府は佐州水替人足の拡充と、無宿収容施設＝石川島人足寄せ場（「無罪の無宿の授産・更正を目的とした絶対的不定期の保安処分」施設－平松）の設置を決め、その後も帰郷政策や非人寄せ場の設置などの試みを幾度と無く繰り返すが、幕府のめざす「江戸からの無宿人の一掃」はどれも徒労に終わった感が強い（人足寄せ場は後に有罪受刑者に対する刑罰的施設へと変質し、明治期初期、囚人労働へと引き継がれて行く）。

要は、江戸幕府と無宿人との「壮絶なイタチゴツ



飢饉で放浪する流民（天保飢饉救恤図より）

コ」が開始されたのである。召し捕らわれずに逃げのびた無宿人は、ある者は木賃宿に身を隠し日雇人足などになり、ある者は「岡場所」で私娼となり、ある者は乞食親方のなわばりの目を盗みモグリの乞食をし、封建的身分制度の底部に多く積み重なりながら、粘り強く生き延びて行くのである。

千住小塚原、鈴ヶ森、深川など非人系部落や、乞胸（大道芸人集団）願人（門付、大道芸を生業とする下級僧）など「賤民層」が住む下谷万年町、四ッ谷鮫ヶ橋、芝新網町などの「ぐれ宿」密集地、「雲助」、大道商人、出稼ぎ日雇人足、旅芸人などが利用する品川、新宿、板橋、千住など宿場町にあった「雲助宿」（木賃宿）密集地が、明治期以降、没落農民や都市貧民が流入しスラム街や木賃宿街へと変遷して行ったと言われている（本田豊）。江戸時代の無宿人もこれら同じ境遇の者が集う地に集い「唯だ丸竹を四方に樹てて柱とし、その上に菰を覆ひて覚束なくも雨露を凌ぐに過ぎ」（朝野新聞）ぬような、「菰のテント」を建て「不法占拠」をし、召し捕らえられれば勾留覚悟のインフォーマルな生業をしながら、それぞれ生き続けてきたのであろう。明治期に発刊された朝野新聞の「徳川制度」の中に、モグリの乞食を描写した項がある。「江戸市内の親方16人は月々会議などありて、乾児こぼんの配分も自ら乱雑なりざりしが如くなれども江戸以外の乞食頭に対しては、嘗て何等の交際もなく外より入りたるものあれば之を拒みて江戸以内に容れざりしと

云う。されども江戸以内には彼の親方の支配を免れ居たるモグリ乞食の類もありしことと見え、下町、摩利支天まりしてんの堂前に畳半畳を置き、之れに布団を敷き冬期は一個の火箱を抱えて毎日参詣人の履物を揃え銭を乞ひたる老夫婦ありて日々六百文以上の貰ひありしよしなり。想ふに此類もまた少なからざりしにや」。無宿が無宿なりに懸命に生き抜いていた姿が思い浮かばれる。

江戸における無宿人の数は対策化された部分しか分かっていない。非人頭が掌握していた部分で抱非人、野非人を合わせ、天保8年（1837年）で13、266人という数字が残っている他、天明期の溜取容年間約千数百名、佐州水替人足は延べ約2000名、人足寄せ場への収容者は天保期以降、最高約600名、平均して常時400-500名、非人寄せ場は最高約150名と言われている。その時々によって人数の変化はあるであろうが、常時、数万規模の無宿が江戸の街を滞留していたことが推測され、対策化されたのはそのごく一部の者たちであったことが伺われる。

この時代の一人の無宿人にとって、郷里から離され、都市へと流入し、困窮した生活を余儀なくされるのは、不可抗力な出来事であった。そもそも「財の余らぬよう、また不足せざるように」という徳川幕府の農業政策は農民に最低限の生活を強制し、疾病や自然災害などの理由でいとも簡単に潰百姓化せざるを得ない基盤の上になりたっており、その時代の誰が無宿となってもおかしくはなかった。

江戸後期における商品経済の浸透、農村の窮乏化に加え、厳格な身分差別により農村の中には諸矛盾が堆積し、相次ぐ飢饉地獄の中での餓死、疾病死、逃散、間引き、中下層農民の没落、人口減による生産力の低下と農村の荒廃が広まり、これらの封建末期的諸矛盾は天保・慶応期における百姓一揆の多発として表現された。が、幕末期の歴史の中で無宿人は諸矛盾の象徴としての位置しか占めていないし、都市に滞留しホームレス化したことにより初めて都市治安対策史の対象として歴史に名をはせたに止

まっている。事実、階級全体の窮乏化の中で、全ての困窮層が無宿化した訳ではなく無宿化した人々は最下層のごく一部の部分であると言えるだろう。

けれど、この無宿人層はこの時代の最底辺として、江戸末期の幕府体制下に常に権力者を脅かす存在として存在し続け、そして生き延びた。彼・彼女らの抵抗の仕方は一揆や暴動としてではなく〈ともかく生きる〉ことにあったのではないか。無宿が罪

とされ、拘禁労働を強制されていた時代の中、治安や対策の網の目をくぐりながら、いかに生き延びるか。ここにこそ、無宿化させられた彼・彼女らの腐心があったろうし、そこにこそ彼・彼女らの生きる執念は発露されたであろう。辛うじて生き延びた彼・彼女らはそのありのままの存在を武器にしながら封建制度とたたかってきたとも言える。

### 活動日誌

8/21 東京都福祉局は、北新宿の「自立支援センター暫定実施」構想を事実上凍結し、それに代わって都内2ヶ所の民間宿泊所を使った「自立支援事業」（定員25人、期間2ヵ月）を実施すると発表。

8/25 都福祉局が新宿駅西口地下広場において「自立支援事業」の受付の街頭相談を強行しようとする。野宿の仲間100人が会場に押しかけ、当事者への事業内容の説明を求めるが、都職員は説明をせずに退散。街頭相談は中止になる。

9/10 新宿連絡会事務局は、8/25の事態を受け、「自立支援事業」の強行に反対する声明を発表。

9/12 連絡会は、次回街頭相談に前の説明会を実施することを求める申し入れ書を都福祉局に提出。

9/17 上野公園で「公園再生計画」にかこつけて野宿の仲間が排除されようとしている問題で、上野のテント生活者が中心となって公園管理事務所に対する抗議行動が行なわれる。新宿の仲間も上野の仲間と連帯して30人が行動参加。

9/26 連絡会は、東京都第三建設事務所（三建）が西口地下広場の一角にシャッターを設置したことに関して、三建に質問状を提出。三建側は「シャッターは災害時に使うもの」と答えた以外、回答を拒否。

10/8 都福祉局は、9/12の連絡会申し入れに応じて10/13の次回街頭相談の前に当事者への「説明会」を開催することを発表。

10/13 都福祉局による「説明会」に野宿の仲間50人が参加。福祉局保護課長は「排除はしない」「仕事が見つからなかった人を路上に戻すことはせず、生活保護などで対応する」など4つの約束を仲間の前で表明。その後の街頭相談では、16人が入所を決める。（他に電話相談で2人が入所）

10/19 日雇全協第13回大会（横浜・寿）に新宿からも30人が参加。都との直接対話をからとったという成果を発表。

10/23～24 三建による今年三回目の西口地下広場の「一斉清掃」が行われる。特に混乱なく終わる。

10/24 1・24裁判（一番は無罪）の検察側控訴趣意書がようやく提出される。「ダンボールハウスはゴミだ」と主張。控訴審裁判が始まるのは冬になる予定。

10/31 都福祉局による二回目の街頭相談。9人が入所。

※ 現在、都による「自立支援事業」の開始を受け、連絡会は週一回、寮に入った仲間への面会・交流活動を行なっている。10月13日の「説明会」で都側が野宿の仲間と約束した事項を守らせ、寮に入った仲間が不利益を被ることのないよう、寮の内外を貫いた取り組みを展開している。

収入	郵便振替カンパ	169625
	通信会員費	35000
	路上カンパ（通信売上など含む）	77319
	個人・団体カンパ	86000
	フリーマーケット売上	25807
	Tシャツプロジェクト収益	75520
	合計	469271

支出	炊事関連費	97395
	交通費	166520
	印刷費	45842
	コピー・DPE	5401
	文具・図書費	5057
	燃料・駐車費	11568
	電話代	20563
	発送費	30330
	業代	11191
	備品・雑費	24386
	合計	418253

### 会計報告（9～10月）

❖ 越冬カンパ、ボーナスカンパをお願いします！

収支	51018
前期繰越金	△732309
残高	△681291

Tシャツ販売やフリーマーケット出店などの「事業展開」の成果もあって、なんとか赤字の拡大を防いでいますが、これから出費のかさむ越冬期を迎えるにあたって、かなり苦しい財政運営を強いられます。どうか一人でも多くの方々のご支援、ご協力をお願いいたします。

越冬カンパ送り先：郵便振替口座 001

70-1-723682「新宿連絡会」

1ページの投稿は、東急ハンズの紙袋を破ってその裏に書かれたものでした。「京都二条河原の落書」から6世紀半、世の中の仕組みというものは、そうそう簡単に変わるものではないのかもしれない。

編集後記

空気がぐんと冷えてきました。空が透きとおり、今紅葉がきれいです。枯れ葉が散ると、寒い季節がやってきます。お体には気をつけてお過ごし下さい。